

チームに協働を生み出すためには、プロセスの視点を

ラボラトリー方式の体験学習の世界的な拠点となるNTL (National Training Laboratories) Instituteと本研究センターとのパートナーシップが、2006年度に結ばれました。その年はNTL Instituteの設立(1947)から60年の節目の年でした。それから3年をかけ、本センター主催で、NTL関係者による組織ラボラトリー「グループプロセスコンサルテーション」のワークショップが実現しました。講師としては、Cuck Phillips氏がやってきて下さいました。彼は、「Intervention Skills: Process Consultation for Small Groups and Teams」の著者W. Brendan Reddy氏と長年コンビを組んで、米国での組織開発コンサルタントとして活躍されている方です。2010年2月17日から22日にかけて5泊6日の宿泊型のワークショップが清里清泉寮にて行われました。参加者も、17名で、充実したグループプロセスコンサルテーションのプログラムを体験し、グループプロセスに着眼した介入のスキルを広く深く学ぶことができました。

そのワークショップでは、「コンテンツとプロセス」、そして「タスク・プロセスとメンテナンス・プロセス」の視点から、チーム活動を診断し、介入することを学びました。まさにチームとして、課題を達成することと、その過程でのメンバーの充実感や幸福感などが実感できるようになること、そしてグループ自身がプロセスから学ぶことができ持続的な成長グループに育てることができる人材をグループプロセスコンサルタントとよんでいます。

いみじくも、本号の特集のテーマは「協働」です。いかに協働を生み出すことができるようになるのか？ このテーマは、グループやチーム活動に携わる人々にとっては永遠の課題であるように思います。協働へのアプローチの手がかりとして、本号の特集記事が少しでもお役に立つならば幸いです。しかし、ただ書かれていることや言われていることを実行すれば、すぐに「協働」が生まれるといったオートマチックなプログラムはまだ見出されていませんし、今後もきっと開発されることは難しいでしょう。一瞬一瞬に起きるプロセスは、絶えずとどまることなく変化していることから、決まりきった介入やアプローチはありえないと考えられます。

NTL Instituteにおいても60年あまり、私ども研究センターにおいても、30年あまり取り組んでいる課題は、目の前に起こっていることや自分の中に起こっていること(プロセス)に気づき、そのプロセスにいかに関わり働きかけることができるかを、研究員自身が絶えず学び続けていくこと・探究し続けていくことであると思います。

本紀要『人間関係研究』がプロセスの探求と学習の一助になれば幸いです。



清里から望む富士山（Chuck氏による組織ラボラトリーにて）